

「空気」は行動を決定するか

——行動の予測因としての態度およびその他の変数に関する研究とその展開——

田 中 國 夫
井 上 和 子

1. 行動の決定因としての「空気」研究の背景

(1) 「空気」の所在

冒頭から少々、永い引用で恐縮であるが、ここで論述しようとする主題の味を適切に表わしたものと思われるので敢て行なうことをお許し頂きたい。

“イラクのクウェート侵攻から一ヶ月たった。イラク国内では、日本人を含む外国人多数が人質として自由を拘束されている。そして湾岸地域には国連決議を背に米国などの多国籍軍。緊張が続く。日本政府はようやく対策を発表した。▽一ヶ月を振り返って痛感することがある。ものごとが決まるまでの経過が計画的な処理能力に欠けて、時間がかかるということだ。……緊急事態発生の日、首相は官房長官や外務次官と協議し、制裁への共同歩調など基本的方針を話しあった。これは結構だが、その後、衆知を集める形での討議がなかなか行われない。自民党は緊急総務会が開けず見送りにした。与党は、外交問題は政府の専権事項だ、などと言い、野党とも議論しない。▽中東問題の専門家を集めて情勢を検討する、臨時国会を開く、せめて委員会で緊急討議をする、あるいは危機管理のための会議を開く、などの手を打つことを普通の人なら考える。多様な意見を集めて調整、決断するほうがよいからだ。だが、政治家はそうは考えないらしい。事態はどうだったか。▽ずいぶん時間がたってから、議論の形ではなしに、散発的に意見が出る。観測気球を打ちあげる形である。「対潜哨戒機、掃海艇の派遣検討を」。「自衛隊派遣は現在の法制下でも可能」。自民

「空気」は行動を決定するか

党の実力者たちの見解だが、それらが一般の人々にも見える場で討議されるわけではない。▽打ちあげられた気球を見あげ、人々の間に何らかの雰囲気が生まれる。そう期待する政治手法なのか。まことに、のんびり、だ。……”(朝日新聞、天声人語、平成2年9月1日)。

おなじみの朝日新聞の天声人語の一節であるが、文中、終りの部分に出てくる「雰囲気」こそ、ここでとりあげようとする「空気」に該当するものと考えてもらってよろしい。

十分な論議がつくされることはなく、いくつかの無責任な言辞の交換それ自体が一種の「空気」を醸成していき、最終的にはその「空気」が決断 (decision making) の基準となることが、政治の世界だけではなく、われわれの身近な社会生活や職場生活の中にも多いことを我々は体験で知っている。ただ、この天声人語では日本の政治がある種の意図を秘めた作為的な人工空気を醸成するというようなテクニックを用いることが多いのでそれへの警告を発したものであるが、「空気」は、一般的にはこのような人工的操作によって常に作られるものではなく、さきにも述べたようになんとはない言葉の交換によって不作為に、自然発生的に醸成されることが多いのである。

そこで次には、自然に発生する、まさしく他愛のない例をあげよう。

今日、夏の風物詩にもなっている就職活動に際し着用する大学生のリクルートルックなど、「空気」が行動を規定している最適の事例だと考える。リクルートルックといわれるものが登場したのは昭和51年であった。その年に大学生協東京事業連合が、伊勢丹の協力でリクルート用のスーツを売り出したのが最初であるから、もう10数年の年月が経過している。その間、時代も推移し、若もののファッション感覚は年ごとに洗練されてきているにも拘らず、あのリクルートルックの格好以外は規則違反と思ひこんでいるかのように炎熱のビル街を歩き続けている。この10数年の間に、就職活動学生や、しかるべき機関がリクルートルックの妥当性についての議論や調査にもとづく正当性のデータをつみあげたという話はきかない。企業側も「機会あるごとに気軽な服装で来るようにいっているのですが、目を引くような学生はいませんでした。」(NTTの

人事部の担当者）（朝日新聞、1988）といている。つまりリクルートルックが正当であるというデータも根拠もないにも拘らず、リクルートルックを着用しているとすると、その正当性の根拠は、この状況では「制服のような洋服を着ざるを得ない」という「気圧のような圧力」、即ち、「空気」にしか見出せないと考えるのである。

話しが就職活動学生の着用する洋服のレベルの場合は、それこそ夏の風物詩程度のものであるが、社会生活や、時に国家の存亡そのものにまでかかる種類の「空気」ともなると笑ってすませるようなことではなくなってくる。ここでは念のためにそれらについてさらに二例あげることにしよう。

一つは最近の「空気」で、それは昭和天皇の病状悪化とともに、日本列島を覆った生活全般に亘る重苦しい自粛の「空気」である。昭和63年9月19日、天皇の御容態の急変から除々に「空気」は、いわば圧力を増し、公のハレの行事、また、歌舞音曲のたぐいを伴うパーティ等はとりやめが続く。そしてそれは翌年1月7日の天皇崩御で異常な高まりにまで上昇し、2月24日の大喪で足並みを整えて完了するという形で終息した。その間、特別にハレの行事について自粛するようにという布令が出たわけでもない。それどころか、逆に、皇太子殿下の談話として自粛のムードによる各種行事の中止が社会生活と経済活動に停滞をひき起こすことのないようにという要望が出されたほどであった。

ところが、国民大衆には「自粛することを当然のこととして国民全体が了解している」ということの了解が成立していて、人々はこの了解にもとづいて行動したと考えられるのである。

国民の総意かどうか不明であるにもかかわらず、国民的了解として了解し、それに従うという行動をとったのである。こうなれば「空気」が大規模な「自粛」行動の決定因となったとしかいいようがないと考える。

もう一つの「空気」をあげよう。

それは太平洋戦争末期、作戦としては全く形をなさないにもかかわらず、日本海軍の至宝、そして連合国には「幻の大戦艦」と恐れられていた巨艦「大和」に無謀な出撃をさせた「空気」についてふれておきたいのである。

「空気」は行動を決定するか

この事例については既に山本七平がその昔「空気の研究」（山本七平、1977）においてとりあげ、戦艦大和を特攻出撃においこんだのは、当時の「全般の空気」としかいいようがないと結論している。

吉田満・原勝洋著「ドキュメント戦艦大和」（1986）の中で述べられている関係者の証言の中から、「空気」のせいと推定せざるを得ない部分を摘出してみよう。

戦いというのは合理にもとづいて遂行されねば勝つことはできないことは当然のことであり、海軍はこの点に関しては特に合理の権化といわれるほど徹底していた。

連合艦隊作戦参謀三上作夫中佐の証言にもそれが明らかにみとめられる。“いかなる状況にあろうとも、裸の艦隊を敵機動部隊が跳梁する外海に突入させるということは作戦としては形を為さない。もう戦さの上手も下手もない。……”（吉田満・原勝洋、1986、p. 67）。これが当時の海軍としては当然すぎるほど当然の常識であった。海も船も空も知りつくしているベテランのエリート集団のメンバーの殆んどはこれと同じ見解であっただろうと推察される。

戦艦大和の出撃、つまり沖縄にむけての水上特攻作戦の開始は4月6日であったが、4月4日夜、連合艦隊参謀長草鹿龍之介少将は突然、東京からの電話で「大和」以下の水上艦隊の特攻作戦を知らされている。

つまり、「大和」以下の特攻突入作戦の決定はそれほど唐突であったのである。児島襄によれば、“この種の作戦、とりわけ帝国海軍に残された水上兵力の総力を投げ出す重大作戦となれば、当然、軍令部、連合艦隊、さらに第二艦隊の首脳部の綿密な連絡と、協議を経て決められるはずだが、第二艦隊司令部は伊藤整一中将（第二艦隊司令長官）以下誰も知らされず、軍令部、連合艦隊の幹部のほとんど、草鹿少将と同じく、連合艦隊司令長官と軍令部総長の決裁後に通告されているのである。”（児島襄、1979、p. 188）。

それでは肝心の沖縄水上特攻作戦という非合理きわまるデンジョン・メイキングがどのような形でなされたのかという点であるが、これについては連合艦隊参謀、小林儀作中佐の次のような証言がある。“……連合艦隊司令部で毎朝行

なわれる作戦会議では、長官を補佐する立場にある幕僚が、大和出撃に関していろいろな意見を出した。敵に制空権を取られている時、大艦を出しても敵飛行機の餌食になるだけだ。無理だ。しかし、このまま沈めるより、軍艦としての華々しい最後を飾らせることの意味はある。万が一沖縄に突入したら、一八吋砲を射ちこませる。……豊田長官（連合艦隊司令長官・豊田副武大将）は侃々諤々の意見を出させて、じっと聞いていた。そして「大和は沖縄に突入さす」と断を下し、「協力しろ」と宣言した。……」（吉田満・原勝洋、1986、p. 41）。

結局は“軍艦としての華々しい最後を飾らせるため”ということだけで沖縄突入を計画したことになるが、合理を尊ぶ海軍にとって想像もできない非合理にすぎる決定をしたことになるのである。

このような非合理きかわる決定においこんだ背景をよくみると、強力にこの作戦を提案し続けた神重徳大佐（連合艦隊前任参謀）の意見の影響も大きいが、“……作戦課（軍令部作戦課）の周囲にいる人たち、みずから特攻に行くでもなく、また特攻を命令する立場にもない人たちが、盛んに「一億総特攻」と言い始めたのである。”（軍令部作戦課部員、土肥一夫中佐証言）（吉田満・原勝洋、1986、pp. 63～64）といった周囲の雰囲気も見逃せない。

このような発言が出てくる背景をさぐってみると、結局は特攻作戦の強力推進者である神参謀のそのような作戦をせざるを得ないとする根拠にまでさかのぼっていかざるを得ないように思う。

連合艦隊参謀副長・高田利種少将は次のような証言をしている。“……神参謀はもし大和を柱島あたりに繋いだままで、大和が生き残ったままで戦争に敗けたとしたら、何と国民に説明するのか、というところを私に一番熱心にやりましたよ。……沖縄のあの浅瀬に大和がノシ上げて、一八吋砲を一発でも射ってごらんさない。日本軍の士気は上がり、米国軍の士気は落ちる。どうしてもやらなくてはいかん。もしこれをやらないで、大和がどこかの軍港で繋留されたまま野たれ死にしたら——。非常な税金を使って（当時の金で一隻の建造費一億三千万円程度）、世界無敵の戦艦、大和、武蔵を作った。無敵だ無敵だと宣

「空気」は行動を決定するか

伝した。それをなんだ。無用の長物だといわれるぞ。そうしたら今後の日本は成り立たないじゃないですか、ということを僕にさかんに言う。……”（吉田満・原勝洋、1986、pp. 59～60）。

神参謀をして無謀きままりない作戦のとりこにさせたのはこの証言の中にあるように「……何と国民に説明するのか」、「……無用の長物だといわれるぞ」という国民全体からの期待の認知であり、これにもとづいた主張が、たとえそれが非合理的なものであっても連合艦隊司令部での作戦会議においてこれを無謀とする合理的判断を排し、豊田連合艦隊司令長官をして「大和を沖縄に突入さす、協力しろ」という宣言にまで至らしめたと考えられるのである。

さらに興味深いのは、この豊田連合艦隊司令長官は戦後、次のような証言をしていることである。“戦後、本作戦の無謀を難詰する世論や史家の論評に対しては、私は当時ああせざるを得なかったと答える以上に弁疏しようと思わない”（山本七平、1977、pp. 15～16）。山本七平はここで「ああせざるを得なかった」ようにしたのは「空気」であったからだと説明するのである。私達はこの「空気」をさきに述べたように神参謀、そして豊田長官が判断の基準にしたのは国民全体からの期待の認知という形でとらえ、この「空気」の要因を社会心理学的な手法を用いて説明しようとするのであるが、これについては後に述べる。

いずれにしろ、大和の出撃を無謀とする人々には、それを無謀と断定するに至るデータ、即ち明確な根拠があった。しかし、出撃を当然とする方の主張にはそういったデータや根拠はなくその正当性の根拠は陸軍の必敗の総反撃に呼応し、沖縄のあの浅瀬に大和をノシあげ陸兵になっても戦わねばならないという思いがあるだけであった。これをさらに正確に言えば、一億総特攻の今、大和はそのさきがけとして国民の期待に応じねばならぬというムード、つまり「空気」の認知の表明があるだけであった。正当性の根拠が「空気」の認知の表明である以上、もはや議論の対象にならず、豊田連合艦隊司令長官の命令は部下に次々と、「それならば何をか言わんや」とスナナリとうけ入れられ、将兵達は死地に向って出撃するための覚悟をかためるだけの方向につき進んでいったのである。

(2) 「空気」を説明する二つのセオリー

その一つは山本七平説である。

太平洋戦争のまさに末期、日本海軍の切り札、戦艦大和が撃沈されることは明々白白であるにも拘らず出撃の決定をなさしめたのは人ではなく「空気」であるという山本七平の見解については既に述べた通りである。しかし、氏は空気が重要な最終決定者になる事例は日常茶飯にあることで、次のようなことばがそれを示しているという。「ああいう決定になったことに非難はあるが、当時の会議の空気では……」「議場のあの時の空気からいって……」「あのころの社会全般の空気も知らずに批判されても……」「その場の空気も知らずに偉そうなことを言うな」(山本七平、1977、p. 12)。これらはまさしく日常しばしば経験するところである。戦艦大和の出撃について当時、軍令部次長であった小沢治三郎中将が戦後30年を経た昭和50年の時点においても尚、「全般の空気よりして当時も今日も(大和の)特攻出撃は当然と思う」(吉田満、1975)という発言をしているが、空気というものがいかに“絶対の権威”をもち驚くべき力をふるうものか知らされるとともに、大和出撃の後、まもなく本土決戦用特攻初級尉官養成のため陸軍予備士官学校に入校した筆者には特別の感慨をもって空気の恐怖を身を感じるのである。

ここで、山本七平が解明する空気に関する興味深いセオリーに論を進めよう。氏はさきにあげた「空気の研究」において、戦艦大和を出撃させた「空気」のほかにロッキード問題、公害問題、天皇制、さらにさかのぼって西南戦争等を例にあげ、日本における空気の支配を臨床的に報告し、解明を加える。一方、西洋における宗教改革、旧約聖書の世界を解説しながら空気の支配を拒んでいる外国と、対照的な日本を対比させながら興味のつきない比較日本人論を展開する。

氏はここで問題にしている「空気」を“非常に強固でほぼ絶対的な支配力をもつ「判断の基準」(山本七平、1977、p. 19)と規定する。そしてそれはそれに抵抗する者を異端として、「抗空気罪」で社会的に葬るほどの力をもつ超能力であると。ここでいう「空気」に該当する外国語はルーア(ヘブライ語)、プ

「空気」は行動を決定するか

ネウマ（ギリシヤ語）、アニマ（ラテン語）に相当するものだと氏は言う。ルーアの訳語がプネウマで、そのまた訳語がアニマという関係になっており、アニマから出た言葉がアニミズム（物神論）で、日本では「霊」と訳されているのだと解説する。しかし、原意は wind（風）、air（空気）であり、古代人は息、呼吸、気、精、人のたましい、精神等々の意味に使った。結局、目に見えぬ何らかの「力」ないしは「呪縛」、いわば「人格的な能力をもって人びとを支配してしまうが、その実体は風のように捉えがたいもの」（山本七平、1977、p. 59）として説明している。

さて、この「空気」が発生するメカニズムこそ最も肝心な点であるが、氏はこれを次のように説明する。カドミウムはイタイイタイ病の原因とみなされているが、イタイイタイ病はカドミウムとは関係のないことを証明した書物を書いた専門家が新聞記者と記者会見をした席上、カドミウム金属棒を握って差し出すと、記者達は身をのけぞらせたという例を氏はとりあげ次のように説明する。記者達はイタイイタイ病の悲惨を臨在感的に捉えることによって、この悲惨をカドミウムに乗り移らせ、その臨在感的把握を絶対化することによって、その金属棒に逆に支配されたものだ。臨在感的把握ということをもっとわかり易くいうと、それ自体はなんでもないものに思い入れして、その物の背後に神秘的な力をもとめそれに影響されることだというのである。

戦艦大和の出撃という決定は、論理を超えた必敗の特攻作戦というものの背後に神秘的な力を認め、山本流に言えばその作戦の臨在感的把握が生み出した「空気」がその場の将軍たちを圧倒し、豊田連合艦隊司令長官をして沖縄突入の決断をさせたのだというのである。

山本説は大変興味深い。しかし、それは精神分析学的、臨床心理学的、ないし、発達心理学的な観点からの分析で非常に示唆的であるが、社会心理学的な側面からみると、まだ検討すべき問題が残されているように思う。

それは作戦会議の場に論理を超えた必敗の特攻作戦がなぜ臨在感的把握をさせたのか、つまり、その作戦に神秘的な力を認めさせるようなことになったのかということである。神参謀という水上特攻作戦の強力な推進者の強烈な発言

が、他のこの案の消極論者を圧倒し、神秘的な力をもつに至った背後には、当時、国民全体を覆っていた海軍、そして戦艦大和への圧倒的な期待の認知が豊田長官以下、各参謀にもあったはずで、それがなければ「空気」は発生しなかったはずである。「空気」が発生するかないかは、その作戦会議室にいる参謀ひとりひとりが国民からの戦艦大和への特別の期待をどれ程認知していたかにかかっており、その強度を明らかにすることが社会心理学的には残っていると考えるのである。

Fishbein, M.のモデルはこの点を明らかにする恰好の手法だというのが私達の見解である。この点からの説明は後に行なう。Fishbein, M.のモデルが、このような「空気」をどのようにして、どこまで捉えているかを私達が行なった研究結果に基いて説明することにする。

その前にもう一つの私達のいう「空気」現象を説明する別のセオリーを紹介しよう。

それは間庭充幸のセオリー（間庭充幸、1990）である。

間庭が「日本的集団の社会学」において展開したのは日本の社会集団の構成原理を集団文化に焦点をおきながら、客観的、批判的に分析したユニークな所論であることは周知の通りである。氏が注目するのは「包摂」と「排斥」という二つの要素である。この両者が特定のイデオロギーや信仰についてではなく、人間丸ごとに対して行われるのが日本の集団の特徴であるとする。しかも、両者はしばしば共存するという。排斥とはいっても、他者を完全に集団の外部に排除するのではなく、集団に同化しきれない人々を集団の周辺部分に遠ざける、つまり排斥の包摂という形をとるとする。このとき人々は集団の中心にどれだけ近いかによって一元的に序列化されるというのである。

このとき、同質的なものの包摂に向けて常に強い競争が働く、即ち、集団への同調（集団がもつ価値への同質化）が競争的に行われることになるという。これによって集団自体の一体化が進み、対外的に強い競争力を発揮することができ、これが日本の近代化を支えてきた集団的特質であったと分析を進める。

ところが、この先、同調的競争（競争的同調）と、同調競争とを区別して考

「空気」は行動を決定するか

察するところが興味深い。この区別が、私達のさきにとりあげてきた戦艦大和に期待された「空気」から決行に至った行動と、昭和天皇の御病状悪化とともに発生した「空気」が引き起こした「自粛」行動のちがいを、見事に説明してくれる。

同調的競争とか競争的同調というのは同調すべき目的があって同調し、さらにその目的に早く近づくために競争する場合の同調行動だとする。例えば、その目的は金銭とか地位とかいったものであるが、私達のさきにあげた戦艦大和の無謀な水上特攻出撃行動の事例などもまさしくこれに該当し、その目的は天皇への忠誠のため、国民からの期待に沿うため、海軍の、そして栄光ある戦艦の名誉のために最も至近な距離の行動に邁進したものと分析できるのである。

これに対し、同調競争はちがうと間庭は指摘する（間庭充幸、1990、p. 51）。文字通り、同調という行為（多数者）自体への同調や競争で、それは同調的競争がある限界を超えた時に起こるもので、その時点では肝心の目的が脱落してしまい、それとは別の目的に向っての新たな同調や競争が発生するものとされる。これは昭和天皇の病状悪化にともなって引き起こされた「自粛」行動の分析には見事に適用される。昭和63年9月、天皇が病床につかれた当初には、天皇の「ご容体」を心から心配して各種のイベントを自粛するという目的内容に見あった行為がとられていた。しかし、時間の経過とともに、「自粛」という行為そのものへの同調に変化していった。何のための自粛かよりも、「全国の自粛の動きを見て」「各地で催しが中止になっている折に」ということになり、もし、自粛しないと何をいわれるかわからぬという恐怖のために自粛行動をとり続けたのであった。

この同調競争のメカニズムは、さきの直接的な目的にかかわっての同調的競争と緊密につながっていることにもここでふれておく必要があるだろう。間庭はこの両者は土俵を共有するが、現象的には相互に独立の関係にあるという。しかし、日本の場合、この同調競争が重要な意味をもっており、それがかえって同調的競争を一段と熾烈化してきたと分析する。

このメカニズムは戦艦大和の出撃行動にそのまま適用することができる。

太平洋戦争において敗れた原因は、陸軍と海軍どうしのお互いのはげしい戦いの余力をもって米英と戦ったからだということが今もって語られている通り、私達の想像以上に陸軍と海軍の軋轢は熾烈であったことは事実である。「大和」出撃に至るまでの多くの証言の中に、陸軍との強い対抗意識をよみとることができる。さらに海軍内でも、水上部隊は航空部隊を意識して、競争心をむき出しにしていることも多くの関係者の証言からうかがうことができる。

いずれにしろ、ここにはとりわけ他からの圧力やコントロールが働いたわけでもないのに、日本人は戦艦大和のケースのように2,489名の乗組員を死に至らしめる一方、日本の敗北を決定的にさせるような行動に走るかと思うと、天皇の御病状の悪化の報とともに、市民の社会生活や経済活動に停滞をひき起こすような、各種の「自粛」行動に走るといった行動のメカニズムを説明する明快なセオリーの提起がある。そしてそれは包摂（同化）と排斥（異化）の相互作用から成りたっている日本的な集団構造が必然的にその成員にもたらす無意識の抑圧から発するものだというのが間庭セオリーである。最も典型的な事例を用いて説明すればわかりよい。合理と冷静の鬼といってもよい連合艦隊司令長官、豊田副武大將をして非合理の極ともいえる水上特攻作戦という行動にふみきらせたものは、結局は日本的な集団構造が豊田大將に与えた無意識の抑圧であったというのである。この無意識の抑圧をうけてなびく非合理への行動が天皇への忠誠のトップでありたいという同調的競争を、そして一億総特攻という無内容の行動である同調競争へと走らせてしまったと説明できる。

間庭セオリーの紹介に深入りしてしまった感があるが、この紹介を通して言いたかったことは、この間庭セオリーも、人間行動を同調や競争で説明する社会学的な分析であり、「無意識の抑圧」といった術語で説明する精神分析学的な解釈であって、実証的な社会心理学的アプローチとは異質であるということである。

しかし、ここで山本説と間庭説をとりあげたのはこれらのセオリーが誤りであるとか、無意味であるとかいっているのではなく、人間に時に無意味な行動を強いる得たいの知れない、ここでいう「空気」としか言いようのない決定因

「空気」は行動を決定するか

と、それがひき起こしたと思われる行動との関係を、社会心理学以外の人達はどこまでどのようにして解明しているかを明らかにし、自分のアプローチの位置を明らかにしたかったためである。山本七平のセオリーも間庭充幸のセオリーもいずれも私達に大きな刺激を与えずにはおれないものであった。

これらを参考にしながら、私達、独特の「空気」への接近について今まで試みてきた成果を中心に以下、述べることにする。

2. 「空気」研究に対する Fishbein, M. モデルからのアプローチ

(1) Fishbein, M. モデル

Fishbein, M. & Ajzen, I. (1975) によれば、行動は、その行動をしようと思う行動意図によって起こされ、その行動意図は、「行動に対する態度」と、「主観的規範」によって決定される。すなわち、行動を起こすか、起こさないかは、その行動の遂行が個人の価値の実現や目標達成に好ましい結果をもたらすか否かの判断と、家族や友人といった人々（重要他者）が、そう行動すべきだと思っているか、すべきでないと思っているかの認知の、2つの要因によって決定され、他の諸変数はこれらの2要因を介して間接的に影響を及ぼすだけである、というのである。このモデルの起源は1967年（Fishben, M., 1967）に遡るが、後に自ら「合理的行為の理論（A theory of reasoned action）」（Ajzen, I. & Fishbein, M., 1980）と称しているように、意図的、合理的に行われる社会的行為（行動）を決定論的に捉えたモデルで、その概念図式は図1に示されるとおりである。また、それら概念間の関係は式(1)～(3)の予測式に集約される。

$$B \sim I = (A_B)w_1 + (SN)w_2 \quad (1)$$

B : behavior (行動)

I : intention to perform behavior B (行動意図)

A_B : attitude toward performing behavior B (行動 B に対する態度)

SN : subjective norm (主観的規範)

w_1 and w_2 : empirically determined weights (重み)

「空気」は行動を決定するか

$$A_B = \sum_{i=1}^n b_i e_i \quad (2)$$

b : belief (行動がもたらす結果*i*についての信念)

e : evaluation (結果*i*に対する評価)

n : number of beliefs (信念の数)

$$SN = \sum_{i=1}^n b_i m_i \quad (3)$$

b : normative belief (規範信念)

m : motivation to comply with referent *i* (重要他者*i*に従う動機づけ)

n : number of beliefs (信念の数)

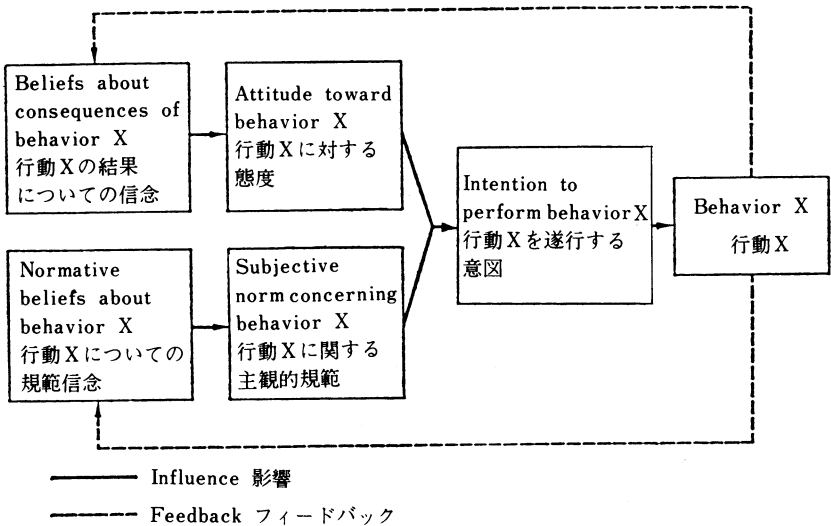


図1 フィッシュバインの概念図式

(Fishbein, M., & Ajzen, I. 1975)

「空気」は行動を決定するか

具体的には、意図 (I) によって起こされる社会的行動 (B) は、行動に対する態度 (A_B) と主観的規範 (SN) という2つの要因の関数と見做され、重回帰式の形をとる。行動に対する態度 (A_B) は、その行動をすることが、よいか悪いか、愉快か不愉快かなどの行為者の評価であり、それは式(2)に示されるように、その行動がもたらす結果の主観的確率とその結果に対する評価の積の総和 (結果は1つではないので) から成る。主観的規範 (SN) は、行為者の準拠集団のメンバー (重要他者: referent) が行為者にそう行動することをどれだけ期待しているかに関する主観的確率と、その期待にどの程度従うつもりがあるかの動機づけ、の積からなる。重要他者は1人ではないので総和される (井上、1977)。

このモデルの特徴としては、行動の様々な規定因と行動との関係を体系的に捉える枠組みを提供したこと、態度という行為者の人格的要因のほかに規範という社会的要因を加えたこと、わずか2要因で行動を説明していること、重回帰式の形をとることによって数量的扱いを可能にしたこと、また、その予測性の高さなどがあげられる。しかし、「合理的行為の理論」と称せられるように、社会的行動が合理的な判断に基づいて起こされることを前提とする決定モデルである。これは、いわゆる日本的「空気支配」のない欧米のモデルとして当然の帰結といわなければならない。しかしながら、「空気」が行動を決定するといわれる我が国において、この Fishbein モデルがその卓越性を発揮するためには、モデルのどこに「空気」が組込まれるのが問題となろう。

(2) 研究1 (井上・田中、1973) から

この研究は、献血、喫煙、カンニング、婚前の性的交渉、「きせる」(不正乗車) の5行動について、関西学院大学の男女学生404名を対象に Fishbein の行動予測モデルを用いて調べたものである。ここで用いられたモデルは当初 (1967年) のもので式(4)に示されるとおりであるが、その内容は式(1)と同じである。

「空気」は行動を決定するか

$$B \approx BI = [Aact]w_0 + \left[\sum_{i=1}^n NB_i Mc_i \right] w_1 \quad (4)$$

B : behavior

BI : behavioral intention

Aact : attitude toward the act

NB : normative belief

Mc : motivation to comply with the norm

w_0, w_1 : weights

ここでは、行動（行為）に対する態度は、例えば、「献血」することが、かしい—ばかな、よい—わるい、有益な—有害な、報いのある—罰のある、といった4つの評価的SD尺度で測定され、主観的規範は、家族、仲間や友達、世間の人々の3種類についてその規範信念が測定され、規範に従う動機づけは省略された。表1はその結果の一部で、主観的規範の要素である各重要他者の期待が行動にどのような影響力を及ぼしているかを分析したものである。表中の数値は重回帰分析の標準回帰係数（ β ）で、各決定因の影響の大きさを表す。

表1 行動意図の各予測因のウェイト（ β ）および重相関（R）

		態度 (Aact)	規 範 信 念 (NB)			重相関
		β	家族 β	仲間や友達 β	世間の人々 β	R
献 血	男	.30***	.30***	.10	.03	.54**
	女	.18**	.35***	.10	.10	.54**
喫 煙	男	.31***	-.02	.04	.17*	.39**
	女	.25***	.29***	.43***	-.10	.62**
カ ニ ン グ	男	.56***	.11	-.06	.13*	.63**
	女	.32***	.02	.32***	-.16	.47**
婚前の性的交渉	男	.41***	.01	.31***	.03	.63**
	女	.34***	.08	.44***	-.12	.64**
「き せ る」	男	.49***	.11	.20**	.02	.65**
	女	.40***	.10	.22**	.05	.62**

全体 N=404 男子 N=226 女子 N=178

* $p < .05$

** $p < .01$

*** $p < .001$

「空気」は行動を決定するか

この表1から、学生の日常的な行動に影響力をもつ重要他者は仲間や友達であり、他の重要他者は影が薄く、特に世間の人々というのはほとんど直接的な影響力がないこと、しかし、献血になると家族がどう思うかが気になっていることなど、読み取ることができる。また、婚前交渉と「きせる」はよく似た結果を示している。調査当時（1972年）、婚前交渉はまだ現在ほど一般に是認されておらず、男女とも自分の態度だけでは行動を決め切れず、仲間や友達の意向に影響されているのが伺い知ることができて面白い。しかし、注目すべきは喫煙とカンニングであろう。喫煙を見ると、男子学生が規範の影響をほとんど受けず、もっぱら自分の態度によって吸うか吸わないかを決定しているのに対し、女子学生の場合は、自分の態度もさることながら、何といても友達はどう思うかによって決定していたのである。当時、関西学院大学では学生運動家でもない限り、女子学生が人前で喫煙することはなかった。若い娘がたばこを吸うなんてもってのほかだという考え方が世間の風潮としてあったのである。この影響が女子の友人規範のウェイトを非常に高く（.43）した原因であると考えることができる。つまり、世間の風潮に逆らってあえて喫煙するためには仲間や友達の積極的な支持が必要であったであろうし、一方喫煙しない場合にはそれが世間の風潮に合致するが故に、仲間や友達の規範をより風潮（非喫煙の方向）に近づけて認知した結果であると考えることができる。カンニングも同様である。男子の態度要因のウェイトが非常に高い（.56）。男子は必要とあらば他人がどう思おうと関係なしにカンニングを執行しているのに対し、女子の場合は、個人的にはカンニングなどはしない方がよいと思っていても、前後左右の男子学生の要請にあえて「ノー」とは言い難い雰囲気が当時の教室にはあって、これが仲間や友達の期待の認知に反映した（.32）と説明することができるのである。

（3）研究2（田中・井上・植村・藤本、1977）から

この研究は、住民の地域における生活行動がどのように規定されているかを調べたものである。調査対象者は名古屋市とその近郊、茨木市、西宮市、神戸

市の住民1,017名である。対象行動は、A：危険な遊びをする子どもへの注意、B：違法駐車ドライバーへの注意、C：違法ゴミ捨て者への注意、の3行動である。規範信念（NB）は、家族と友人、近所の人、世間一般の人、の3種類について測定された。表2はその結果の一部である。

家族・友人の規範信念の影響力（ウェイト）が群を抜いて高い。そもそもこの研究の目的は、地域住民の地域社会に対する態度によって住民を4類型に分け、類型による行動の規定因の違いを見ることによって、地域社会の様相を明らかにすることであった。しかし、表2からもわかるように、3行動を通じて、また、相手が知っている人であろうと知らない人であろうと、家族・友人の規範信念の影響力が圧倒的に高く、近隣の人や、世間の人には直接的な影響力をほとんど及ぼしていない。この場合、地域にコミュニティが存在せず、従って、コミュニティの影響力が明確な形で現われることはないが、行動が自分の態度によって決定されていないのであるから（態度のウェイトが低い）、社会的な要因、つまり、地域に固有の影響力が家族・友人の規範信念のフィルターを経て地域における社会行動を規定しているということもできる。回答者の約8割の者がA行動（子どもの危険な遊び）について注意したことがあると答えているのに対し、C行動（違法ゴミ捨て）については、逆に約8割の者が注意したこ

表2 行動意図(BI)の決定因のウェイト(β)および重相関(R)

	態度 β	家族友人 β	近隣 β	世間 β	重相関 R
A行動 知	.24***	.33***	.14***	.04	.58**
不知	.27***	.54***	.02	.02	.71**
B行動 知	.17***	.61***	.13***	-.03	.79**
不知	.14***	.66***	.17***	-.11**	.79**
C行動 知	.20***	.64***	.10*	-.06	.79**
不知	.14***	.71***	.08	-.05	.81**

N=1017 *p < .05 **p < .01 ***p < .001

A：危険な遊びをする子供への注意

B：違法駐車ドライバーへの注意

C：違法ゴミ捨て者への注意

「空気」は行動を決定するか

とがないと答えている。子どもに関しては別としても、お互にできるだけ非干渉でいるのがよいという「空気」の存在は否定できないところであろう。

(4) 研究3 (井上・広沢・田中、1983) から

この研究は、奈良女子大学文学部付属中学校および同高等学校の生徒、16学級、男女計563名を対象に、次に述べる6行動について、その決定因の発達的变化を調べたものである。対象行動は、(1)今度の期末テスト前1週間はテレビを見ない (以下テレビと記す)、(2)今週の土曜日の晩にラジオの深夜放送を聴く (ラジオ)、(3)今度の冬休みに家の手伝いをする (手伝い)、(4)今度の冬休みに友達と映画を見に行く (映画)、(5)高校生 (大学生) になったら運動系のクラブに入る (クラブ)、(6)高校生 (大学生) になったら単車 (自動車) の免許を取る (免許)、の6つである。重要他者としては、父、母、先生、友達、が取り上げられたが、父、母、および、先生の規範信念の相互相関が高かったのでこれらをまとめ、大人の規範信念として分析した。調査は1982年11月、学期末試験の1～2週間前に行われた。表3は、決定因の発達的变化を見るために、重回帰分析の結果得られた各決定因のウェイト (標準回帰係数 β) の6行動平均を学年別に示したものである。

有意性の検定もないので、数値的処理の妥当性には疑問のある試行的な分析であるが、表3に表れた結果はいささか示唆的である。中1から高3まで、態

表3 学年別にみた、行動意図の各予測因の6行動平均ウェイト (β) の比較

学年	人数	態度 (A_B) β	規範信念		
			大人 (A_{db}) β	友達 (F_{rb}) β	
中学	1年	61	.32	.27	> .15
	2年	108	.35	.13	< .26
	3年	110	.34	.14	< .33
高校	1年	104	.32	.19	< .21
	2年	81	.36	.14	< .19
	3年	99	.32	.24	> .18

度 (A_B) のウェイト (β) の平均値にはほとんど変化が認められないが、規範信念のウェイトに注目すると、大人の規範信念 (A_{db}) のウェイトの平均値は、中1で最も高く (.27)、中2で約2分の1 (.13) になったのち高2までは、高1で少し高くなるものの、ほぼ低いままで維持されるが、高3で再び高く (.24) になっている。これとは逆に、友達の規範信念 (F_{rb}) のウェイトの平均値は、中1で最も低く (.15)、中3で最高 (.33) となり、そののち高3まで漸減する傾向が見られる。さらに、大人と友達の各規範信念のウェイトを比較すると、中1では大人の方が高く、中2から高2にかけては友達が高くなり、高3で再び大人の方が高くなっている。これは、中2から高2にかけて、両親で代表される大人達から友達へ移行していた準拠対象が、大学進学や就職といった将来の進路決定をひかえた高3では再び、大人達へと回帰することを示唆するものである。巣立ちを前にし、世間の風当りを両親で代表される大人達の期待の認知 (規範信念) を通して敏感に感じ取っているのであろう。

(5) 研究4 (井上、1985) から

この研究は、技術革新 (イノベーション) の普及過程における Rogers, E. M. (1962) の採用者カテゴリーの諸特性に焦点を当て、各カテゴリーにおけるファッション行動の決定因を Fishbein モデルを用いて分析することによって、各カテゴリーの特性をより明らかにしようとするものである。

Rogers, E. M. (1962) は、イノベーション採用の時期に基づいて社会システム内の個人を5つの採用者カテゴリーに分類した。それらの特性を要約すれば次のようになる (Rogers, E. M., 1962; 1971: 川本勝、1981: 日下公人、1980)。

- (1)革新者 (innovators): 冒険的な人々2.5%、「他の人々がほとんど気がついていない時点でまっ先に採用する」勇気のある人々。冒険的で独創的、知的能力があり、広域志向的で、専門知識の結論に従う。また、自分の行動に信念があり、別のドラムの音に歩調を合せているという点で遅滞者同様逸脱者である。
- (2)初期採用者 (early adopters): 尊敬される人々13.5%、「チラホラ見かけるようになって、平均的メンバーよりかなり早く採用する」人々。新しいアイデ

「空気」は行動を決定するか

ィアを使用する前に点險を下す人で、社会システムの中心部分のオピニオン・リーダーであり、地域志向的で、従って、社会システムの規範により忠実である。(3)前期追随者(early majority)：慎重な人々34%、「だいたい平均的メンバーが採用する頃になって採用する」人々。旧態を棄て去るに際して最後であってはならないが、さりとて、新しいものごとを最初に試す人間になってもらいたいという無難第一主義である。意志決定は機能や価格よりも普及率が重要な決め手になる。(4)後期追随者(late majority)：疑い深い人々34%、「半数の人が採用した時点でそれに従って採用する」人々。採用は増大する社会的圧力への対応としてなされる。(5)遅滞者(laggards)：伝統的な人々16%、「新しいアイディアをあまり採用しない、そんなことに関心がない」人々。イノベーションを最後に採用する人々で、判断の基準は過去で、最も地域志向的である。孤立者(逸脱者)であるという点、および、自分の行動に信念があるという点で革新者と共通するものがある。

これらの採用者カテゴリーの特性から次のような仮説が立てられた。仮説1：革新者の行動意図(I)は、規範(SN)よりも態度(A_B)によって規定されるであろう。仮説2：初期採用者の行動意図(I)は、規範(SN)によって規定される程度が最も高いであろう。仮説3：追随者の行動意図(I)は、態度(A_B)よりも規範(SN)に規定されるであろう。仮説4：遅滞者の行動意図(I)は、革新者同様、規範(SN)よりも態度(A_B)によって規定されるであろう。

対象行動は、女子学生の被服行動で、革新的と思われる行動から、当時流行中のもの、すでに一般化されている行動まで、各段階を代表する行動として、(1)「友人の結婚式にパンツ・ルックで出席すること」、(2)「マリーン・ルックで学校へ行くこと」、(3)「レースをあしらった小花模様のワンピースを着ること」が選ばれた。調査対象者は、阪神間に在る大学の女子学生921名で、その内訳は、梅花女子大学383名、関西学院大学210名、神戸女学院大学184名、甲南女子大学113名、その他24名であった。

表4(a)～(e)は、各カテゴリー、行動別に Fishbein モデルに従って重回帰分析した結果を標準回帰係数のみを用いてまとめたものである。表中の規範

表4 標準回帰係数 β (カテゴリー別)

(a) INN:革新者			(b) EA:初期採用者		
	態度 (A _B)	規範 (S N)		態度 (A _B)	規範 (S N)
パンツルック	.57*	.24	パンツルック	.29**	.48**
マリーンルック	.55**	.33	マリーンルック	.60**	.18*
ワンピース	.76**	.07	ワンピース	.54**	.29**
(c) EM:前期追随者			(d) LM:後期追随者		
	態度 (A _B)	規範 (S N)		態度 (A _B)	規範 (S N)
パンツルック	.32**	.36**	パンツルック	.34**	.27**
マリーンルック	.49**	.23**	マリーンルック	.38**	.25**
ワンピース	.43**	.37**	ワンピース	.49**	.31**
(e) LAG:遅滞者					
	態度 (A _B)	規範 (S N)			
パンツルック	.14	.29**			
マリーンルック	.39**	.32**			
ワンピース	.48**	.18*			

*p < .05

**p < .01

(SN) は、重要他者として設定された、親、友達、式場や街中で出合う一般の人々、の3種類の規範信念を合計したものである。

表4を見ると、革新者は他者がどう思うかに関係なく、一貫して自分の態度(A_B)によって行動意図を決定していることがわかる(仮説1支持)。初期採用者の場合は、「パンツ・ルック」のような革新性の高い被服行動に関しては主観的規範(SN)のウェイトがどれよりも高く(.48)、規範によって強く規定されていた(仮説2支持)。しかし、当時流行の急騰期にあったと考えられる「マリーン・ルック」になると、逆に、行動に対する態度(A_B)のウェイトが5カテゴリー中最高(.60)で、態度によって規定される程度が最も高かった。また、伝統的な被服行動である「小花模様のワンピース」においても態度変数(A_B)のウェイトが高い(.54)。これは、初期採用者が規範の影響を最も受けるであろうという仮説と対立する。

「空気」は行動を決定するか

そこで、行動による違い、すなわち、「パンツ・ルック」のような革新的な行動は規範によって、「マリーン・ルック」や「ワンピース」のような目下流行中の、あるいは、普及してしまった行動は態度によって決められるということの理由を解明するために、普及率とファッションのもつ機能的選択性の観点から分析が試みられた。つまり、普及率の高さは同調への圧力となる（辻村、1976）一方、ファッションのような機能的選択性を有する行動においては、既に行き亘った、社会的に承認された行動で、従って、自由に選べる選択性の高い行動としての意味を持つと考えられるのである。初期採用者は、革新的な「パンツ・ルック」でこそ追従者がついてくるかどうかを考慮したが、既に社会的に認められた「マリーン・ルック」や「ワンピース」では、もはや点検人としての役割は終わり、流行を先取りするオピニオン・リーダーの特性が現われたものと解釈することができる。これに対し、追従者は行動の種類にあまり関係なく常に規範の影響を受けているといえる（仮説3を支持する方向）。流行は正しく「空気」的であるが、その圧力が行動決定に及ぶのは、採用者カテゴリーの中でも追従者であり、初期採用者はむしろ「空気」をつくる役割を果たしているといえることができるのである。

（6）研究5（谷川・井上・田中、1986）から

この研究は、1974年以来一途に下降し続けている我が国出生力の社会心理学的決定因を探り、あわせて、その将来動向を予測しようとしたものである。調査対象者は、子どもが1人または2人いる35歳未満の母親計359名、対象行動は、「2年以内にもう1人子どもを産むこと」である。重要他者の規範信念は、夫、実の両親、兄弟姉妹及び親戚、舅姑、親友、同じ宗教の人々、の6種類について測定された。現在すでにいる子どもの数と性構成によって、行動意図の決定因がどのように違うかを見たのが表5である。

子ども1人の場合、「2年以内にもう1人子どもを産む」という母親の行動意図（I）は態度（ A_B ）によって、また、子ども2人の場合は規範（ ΣNB_s ）によって決定されていた。さらに、子どもの数と性別でみると、男の子1人の母親

表5 2年以内にもう1人子どもを産む意図に関する重回帰分析

子供の数	N	態度 (A_B) β	規範 ($\sum NB_s$) β	重相関 R
全 体	359	.31*	.52*	.76*
子ども1人	124	.35*	.29*	.57*
子ども2人	235	.26*	.50*	.67*
男1人	61	.57*	.36*	.82*
女1人	63	.36*	.49*	.78*
男2人	73	.34*	.50*	.73*
女2人	54	.36*	.55*	.82*
男女各1人	108	.37*	.49*	.74*

* $p < .001$

は態度によって決定される程度が最も高く、他は規範によって決定される程度が高かった。中でも、女の子2人の母親のそれが最も高い。なお、行動意図については、現在、子どもが1人の母親は、子どもが2人の母親よりも、2年以内にもう1人子どもを産む意図が高かった（1人：2.23、2人：-2.66、+5～-5の11件尺度）。

本研究の結果から、日本の母親は、理想の子どもの数を2人と考えており、3人目を産むかどうかを決定する際には重要他者の影響をより強く受けていることがわかった。2人目ならば比較的自分の態度で決定しているのに、3人目になるとなぜ重要他者によるのか。ここに「空気」の存在を伺うことができる。戦後我が国における多産から少産への急激な転換は、子沢山がもたらす結果、たとえば、経済的負担、子育てにかかる労力、住宅の狭さなどにもよるであろうが、それ以上に、「貧乏人の子沢山」で代表されるような多産に対する否定的な評価が、戦時の多産奨励の反動として生れ、それが「空気」となって、まるで台風のように日本列島を吹き抜け、少産への同調を煽った結果であると考えることができるのである。また、子どもが1人で、それが男の子の場合には、もう1人産むかどうかは自分の態度で決定しているのに対し、女の子の場合に

「空気」は行動を決定するか

は、重要他者の影響が大きい。跡取りの男子誕生をよしとする伝統的価値観が当時（1984年）まだ根強く残っていたことが示唆されて面白い。最近（1990年）は、「子ども1人なら女の子がよい」と言明することが流行っているようだが、はたしてどちらが本当の「空気」なのか、Fishbein のモデルで再度調べてみる価値はある。

（7）研究6（井上・田中、1987）から

喫煙行動の規定因を、男女社会人（公務員）193名と男女学生207名、計400名を対象に調べたものである。「会議室で会議中にたばこを吸うこと」、「食堂でたばこを吸うこと」、「パブ・居酒屋でたばこを吸うこと」、「小さい子どものいる部屋でたばこを吸うこと」、「一般にたばこを吸うこと」の5つの異なる状況が設定された。重要他者としては、家族、重要な人（異性＝夫、妻、恋人）、同性の同僚（友人）、異性の同僚（友人）、そこに居合わせた人、の5種類が取上げられた。表6は状況別にみた予測因のウェイトを比較したものである。

表6のウェイト（ β ）をみると、男性の場合、5状況の全てで態度＞規範で、男性が自分の態度に基づいて決定しているのに対し、女性は、5状況の全てで規範＞態度となっている。先にも触れたが、ファッションにしても、結納の仕様といったものにしても、普及率の高さがその社会の基準、あるいは、規範といわれるものを作り、それに同調するよう圧力が加わると考えられる。しかし、

表6 状況別にみた予測因のウェイト（ β ）の比較

	男性（N=233）			女性（N=167）		
	態度 (A _B)	主観的規範 (S _N)		態度 (A _B)	主観的規範 (S _N)	
	β	β		β	β	
会 議 室	.45*	>	.02	.13	<	.26*
食 堂	.42*	>	.11	.29*	<	.30*
パブ・居酒屋	.31*	>	.25*	.26*	<	.35*
子どものいる部屋	.40*	>	.05	.23*	<	.30*
一 般	.40*	>	.01	.23*	<	.38*

* $p < .01$

本調査の結果からいうと、男性は「社会規範への同調」からたばこを吸っているというわけではなく、3人に2人がたばこを吸うという男性の高喫煙者率は、喫煙への圧力としてよりは、むしろ、男性にとっては喫煙が社会的に承認された行動で、吸うか吸わないかが自由に選べる選択性の高い行動であることを意味すると考えられる。ゆえに、男性は自分の好みに従って自由に決定していると解釈できるのである。

一方、女性の場合は、その普及率の低さから、未だ承認されるに至っていない行動であると考えられる。世間の人はたばこを吸う女性をよく思わないという規範が、吸わない人にはより強い抑制力として働き、あえて吸う人には、世間の目や社会規範の圧力から自分を守ってくれる重要他者の支持が決定因として働くと考えられるのである。これをOLについて具体的にみると、会議室では男性の同僚の規範が抑制の方向で、食堂、パブ・居酒屋では同性（女）の同僚の規範が促進の方向で作用している。つまり、会議室でたばこを吸うべきでないと男性の同僚が思っているかどうかの認知は、喫煙者（2.6点、7点尺度）、非喫煙者（2.5点）ともに喫煙することに否定的で、日ごろ喫煙する女性も喫煙をさし控えていた（2.8点）が、食堂でたばこを吸うべきでないと同性の同僚が思っているかどうかの認知は、喫煙者（3.4点）と非喫煙者（2.2点）とでは異なり、喫煙者の方が喫煙に対して肯定的に認知し、それにつれて行動意図も吸う方にシフトしていた（3.8点）のである。

会議中まわりの男性が煙をふかしているのに女性だからといって自主規制を強いられるなどというのは、まさしく「空気」的影響といわなければならない。しかし、嫌煙権が叫ばれるようになり、男性も、禁煙の方向に吹く「空気」の影響を受けて自主規制することも珍しいことではなくなった。つまり、男性の喫煙行動も規範信念の影響を受けるようになってきたのである。表7はそれを傍証するデータである。

3. 結 び

人間の社会的行動を体系的に捉えんとする Fishbein のモデルにおいて、「空

「空気」は行動を決定するか

表 7 喫煙行動の規定因に関する重回帰分析(意図)

年		態度 β	家族 β	友人 β	一般 β	重相関 R
1973	男(N=226)	.31***	-.02	.04	.17*	.39**
	女(N=178)	.25***	.29***	.43***	-.10	.62**
1984	男(N=282)	.24***	.05	.16*	-.07	.32**
	女(N=221)	.17**	.05	.31***	-.05	.36**
1988	男(N=209)	.51***	.06	.29***	-.06	.68**
	女(N=155)	.26***	.04	.66***	-.15	.68**

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

気」がどこに組込まれるのかを探るために、Fishbein モデルを用いたわれわれの研究を概観した。もとより、これらの研究は「空気」の存在を指定して行ったものではない。また、先にも述べたように、Fishbein モデルは「合理的行為の理論」であり、日本的「空気支配」を想定しているわけではない。しかし、モデルが体系的であるといわれるためには、そのモデルがあらゆる要因をも処理し得るものでなければならない。Fishbein 自身も、「他の諸変数は態度と主観的規範の 2 要因を介して間接的に影響を及ぼすだけである」と述べている (Fishbein, M. & Ajzen, I., 1975)。われわれの研究結果においても、「若い娘がたばこを吸うなんてものほかという世間の風潮」、「男子学生の要請にノーとはいいい難い教室の雰囲気」、「お互いにできるだけ非干渉でいるのがよいという地域の空気」、「巣立ちを前に感じる世間の風当たり」、「流行」、「多産に対する否定的な評価」、「子どもの性別についての選好のはやり」、「喫煙行動の自主規制」や「嫌煙権」など、いわゆる「空気」の影響力は、規範信念のウェイトに捉えられていたことは、先に概観したとおりである。

しかし、われわれがここで問題にするのは、戦艦大和を特攻出撃させ、真夏に学生をリクルートルックで固めさせるような、実体は風のように捉え難いものであっても、合理的判断を超えて、行為者に非常な拘束力を及ぼす「空気」である。スリムな美空ひばりなど誰も期待していなかったと思われるにもかかわらず、美空ひばりをもダイエットに捲き込んだ「肥満はダメ」という「空気」

なのである。これは、他者からの期待の単なる総和では捉えられないのではない。行動の決定因間の交互作用を含むモデルを考える必要があろう。また、普及率のように、別々な期待を持つと認知される複数の他者が、何割がた同じような期待を持つと認知された時に、みんながそうなのだという認知になるのか、その過剰評価に至るメカニズムを数量的に明らかにする必要があろう。いづれにしても、社会的行動を扱うモデルは、この「空気」の扱いを可能にするものでなければならない。そして「空気」の存在を実証する仮説実証型の研究が今後の課題として要請されるのである。

参考文献

- Ajzen, I. & Fishbein, M. 1980 Understanding Attitudes and Predicting Social Behavior. New Jersey : Prentice-Hall.
- 朝日新聞 1988 リクルート・ルックは本当に必要か、9月15日。
- Fishbein, M. 1967 Attitude and the prediction of behavior. In M. Fishbein (Ed.), Readings in Attitude Theory and Measurement. New York : Wiley, 477~492.
- Fishbein, M. & Ajzen, I. 1975 Belief, Attitude, Intention, and Behavior—An introduction to theory and research. Mass. : Addison-Wesley.
- 井上和子 1977 態度と行動 (2)、田中國夫編著、新版現代社会心理学、誠信書房、179~189。
- 井上和子 1985 ファッション行動におけるE. M. Rogersの採用者カテゴリーとFishbeinの予測式、関西学院大学社会学部紀要51号、123~136。
- 井上和子・田中國夫 1973 行動の予測因としての態度およびその他の変数に関する研究 (I)、心理学研究、第44巻、195~205。
- 井上和子・田中國夫 1987 喫煙行動を規定する要因—喫煙行動と主観的規範—、たばこ総合研究センター編、たばこを考える1、平凡社。
- 井上和子・広沢俊宗・田中國夫 1983 青年期における行動の予測因に関する発達的研究、心理学研究、第55巻、95~101。
- 川本 勝 1981 流行の社会心理学、勁草書房。
- 児島 襄 1979 戦艦大和 (下)、文春文庫。
- 日下公人 1980 80年代日本の読み方、祥伝社。
- 間庭充幸 1990 日本の集団の社会学—包摂と排斥の構造—、河出書房新社。
- Rogers, E. M. 1962 Diffusion of Innovations. Free Press. (E. ロジャース著・藤竹暁訳、1966、技術革新の普及過程、培風館)。

「空気」は行動を決定するか

Rogers, E. M. & Shoemaker, F. F. 1971 *Communication of Innovations : A Cross-Cultural Approach*. Free Press. (E. M. ロジャース著・宇野善康監訳、1981、イノベーション普及学入門、産業能率大学)。

田中國夫・井上和子・植村勝彦・藤本忠明 1977 地域社会への態度の類型化に関する研究 (3)、日本心理学会第41回大会。

Tanigawa, K., Inoue, K. & Tanaka, K. 1986 *Social Psychological Investigation on Determinants of Fertility*. Kwansei Gakuin Sociology Department Studies, No. 52, 141~148.

辻村 明 他 (ディフュージョン研究グループ) 1976 伝播普及過程の社会心理学的研究、東京大学新聞研究所記要、24、97~165。

山本七平 1977 空気の研究、文芸春秋社。

吉田 満 監修構成 1975 戦艦大和、文芸春秋、8月号。

吉田 満・原 勝洋 1986 ドキュメント戦艦大和、文芸春秋社。